

指摘する。たとえば、本書で紹介されるレオネ・モデナは、ユダヤ社会のみならずキリスト教世界にも名の知られたラビであり、多くのキリスト教徒と知的、文化的な交流を展開する一方、音楽や演劇、出版・印刷、さらには鍊金術やギャンブルに至るまで、多種多様な文化や芸術を共有し、相互に影響を与えていた。閉鎖的なユダヤ人居住区であったゲットーは、けっしてユダヤ人とキリスト教徒との接触や交流を遮断したのではなく、むしろ身近な異文化に触れ、ヴェネツィアの国際性を体験できる場として、キリスト教徒の関心を集め、両者の接触や交流の舞台となっていたのである。さらにゲットーには、ヴェネツィア都市民のみならず、英語文献として最初にゲットーを紹介したイングラント人トマス・コリヤットやフランス王ルイ一三世の弟オルレアン公ガストンをはじめ、多くの旅行者が訪れていた。キリスト教世界における「内なる他者」であったユダヤ人が暮らすゲットーには、こうしてキリスト教徒による好奇の視線があるいは敵意や憎悪のこもった——視線が向けられていたのである。

近世ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人

について考える本書の隠れたもう一つのキーワードは、まさにこの「視線」であろう。そしてこの視線は、観光地化が進み歴史的な遺産として捉えられるゲットーに対して、いまもなお向けられ続けている。本書の冒頭で、自らの留学中のエピソードを紹介しながら、著者はこうした視線のはらむ問題点を鋭く指摘しているが、ゲットーの空間的な構造や機能を明らかにするだけでなく、現代に至る宗教的マイノリティとしてのユダヤ人へのさまざまな視線が交錯するゲットーの劇場的な性格をもとらえた点にこそ、建築学と宗教学を学ぶ著者の面目躍如たるものがあるといえよう。

ブックレットという簡便な形態ゆえに、本書の個々の論点については必ずしも深く掘り下げられているわけではないが、幅広い視野から近世ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人について紹介した本書は、時代や地域を越えて異文化・異教徒間で展開された接触・交流や摩擦・対立の諸相と多様な相互関係を考えるうえで重要な示唆やヒントに富む好著である。多くの読者を得ることを願いたい。

(A五判 六二頁 風響社

二〇一三年一〇月 七〇〇円＋税)

(藤内哲也 鹿児島大学学術研究院

法文教育学域法文学系教授

岩崎奈緒子著

『「ロシア」が変えた江戸時代

——世界認識の転換と近代の序章——』

本書はロシアとの接触を画期として、江戸時代後期日本におけるヨーロッパ認識の推移を捉え直したものである。

プロローグで示される通り、明治期の知識人は、ヨーロッパを進んだ文明とみなし、その科学技術の進取に努めた。しかし十六世紀時点では、来航した西洋人を「南蛮」と呼んでおり、彼らを文明人とみなす傾向が当初より存在したわけではない。ではこのような認識の変化はどの時期、どの出来事を発端としたのか。本書は天明く文化期にかけての対露外交を挙げる。

第一部「世界を学ぶ」では、幕閣や知識人たちがロシアを認識し、ロシア及び同国

の属するヨーロッパに対する研究が進展する過程を見る。明和八年（一七七一年）、四国沖に外国船が現れた。船の主はロシア軍捕虜のハンガリー人ベニヨフスキーであり、ロシアの南下を警告する書簡をオランダ商館長に送った。ここに謎の国「ヲロシア」が政治上の問題として浮上する。ベニヨフスキー書簡や蝦夷地での抜荷で名前のみ知られていた「ヲロシア」の全容は、工藤平助の「加模西葛杜加国風説考」によって初めて明らかにされる（なお、同書は従来「赤蝦夷風説考」と呼ばれたが、筆者によってそれが誤称であることが解明された）。突如日本北辺に「出現」した大国の存在に幕府は迅速に動く。ロシアの勢力圏を確認するために幕府役人が蝦夷地へ派遣される一方、江戸を中心としてロシアについてはヨーロッパの地理に関する研究が活気づいた。林子平の処罰による研究の停滞・後退を挟みつつも確かに蓄積されていった世界研究の動きを支えたのは、蘭学者の人的なつながりと、朽木昌綱ら「蘭癖」大名による支援、その成果をもってロシア対応にあたった松平定信ら幕閣の存在であった。筆者はこの流れの成果として山村才助の

「訂正増約采覧異言」を挙げる。新井白石の「采覧異言」の増補修正を行ったこの書は、世界の地理情報を充実させたのみならず、ロシアをはじめとしたヨーロッパが世界中を席卷しつつあるという構図を描き出してみせた点に意義がある。この成果は前述の人的ネットワークを通じて幕府にも影響した。政策決定と学問的成果が連動していたことを示しており、当時の世界研究は知的探求の問題にとどまらない。

第二部「ヨーロッパと対峙する」では、ロシアとの外交を行う中で、「鎖国」政策が完成するとともに、蝦夷地やアイヌへの対応が変容する過程を見る。ラクスマン来航時、江戸の沿岸防備の貧弱さが浮き彫りとなる。ロシアに江戸の弱点を悟られず、戦争も行わず、さりとて国書も献上品も受け取らないという目的達成のために幕府は「礼と法」による対応、通信は認めないが通商にはその余地があるという「活路」を提示することによって対応した。この対応は前述のロシア研究の「成果」である一方で、蝦夷地は日本の「内」か「外」か、という新たな問題が浮上する契機ともなった。この問題は、イギリス船の津軽海峡横断と

いう事件により、松前と本州の分断を危惧した幕府による蝦夷地の全土直轄化という結果に至る。この対応は、松前藩が陸上に外国と国境を接することを防ぐ軍事戦略であった一方、アイヌに対しては「教化」による宣撫という、世界研究が明らかにした植民地主義の論理が援用された。通商を要求するロシアに対しては結局、対外貿易による国富流出への危惧から拒絶するが、その対応の根柢となったのは志筑忠雄の「鎖国論」であった。幕府はヨーロッパ諸国来航の目的を正しく認識していたのである、この対策として一切の交流を禁じる「鎖国」体制が完成することとなる。ただし、「鎖国」の代償は大きかった。拒絶への報復としてロシアの「海賊船」が樺太、択捉各所を襲撃した文化露寇事件は、幕府の武威を大きく損なった。幕府は武威維持のために「鎖国」に固執せざるを得なくなる。

第三部「ヨーロッパを受容し、ヨーロッパに対抗する」では、ヨーロッパ船がなぜ日本近海に出没するのかという政治的な疑問を端緒に、日本を世界の中に位置づけ、ヨーロッパの優れた点を受容することで

ヨーロッパに対抗しようとした動きを見る。近海に出没する外国船という問題に対し、司馬江漢は『地球全図』によって、全世界が航路によって接続されていることを示してみせた。また、その理由を追求したのが本多利明である。彼は『経世秘策』にてヨーロッパが富国強兵のために世界進出を行っていること、世界進出を可能にするのはその優れた科学技術にあることを看破した。「優れたヨーロッパ」との認識は、中華思想の否定と新たな「皇国」思想の揺籃へもつながってゆく。また、世界地図において世界の関係性を描き出すとともに、日本の正しい形を自ら位置づける試みも行われた。高橋景保の世界地図や、間宮林蔵の樺太探検はこの動きに位置づけられ、特に間宮の成果は幕府の刊行地図に取り入れられた。地図の発行は、日本の領域を明示する役割も果たしており、択捉や樺太を日本の領域として明示することで幕府の姿勢を内外に示す狙いもあった。ヨーロッパの学問の優越性もはや明白な中、これを取り入れようとする動きは盛んであった。官立の研究機関を設ける試みは結実しなかったものの、民間では適塾など多くの蘭学塾が

開かれ、ヨーロッパの先進性を伝達する拠点となっていた。

エビロークで強調される通り、ヨーロッパに国家や学問の範をとる傾向はその起点をロシアの脅威におくように、政治的必要に駆られての動きであった。福沢諭吉ら武士の蘭学（＝ヨーロッパの学問）進取は沿岸防衛の充実を目的、名目としていた。武士の蘭学学習は、沿岸防衛という形で將軍への忠義を示すためであった一方、この動きがヨーロッパの科学技術を探りいれる推進力となり、ゆくゆくは將軍の存在しない近代国家への道のりを開くこととなる。

江戸時代の対外関係をめぐる研究の進展により、当時の日本が世界から孤立していたとの認識は過去のものとなりつつある。西洋諸国との関係のみならず、清や朝鮮・琉球など東アジアの諸国家との外交についても、研究の進展が見られる。そのなかで本書は、西洋との窓口として注目された長崎ではなく、蝦夷そして江戸を舞台にロシアとの関係を明らかにする北からの世界認識を描いた点に画期がある。加えて「人」をかすがいとして江戸時代と明治時代の連続性を示してみせた点にも注目すべきであ

る。著者があとがきにて述べる通り、一般書として広く人々の目に留まることで、市井では未だ世界から隔絶したとの印象が根強い江戸時代についてその世界認識、近代以降との連続性について新たな発見を得るきっかけになることを願う。

（四六判 二四〇頁 吉川弘文館）

二〇二四年二月 一八七〇円

（岡田 悠誠 京都大学大学院

文学研究科修士課程）